

清末民初における湖南省教育会の 職員構成とその変容

宮 原 佳 昭

は じ め に	395
I 湖南省教育会の成立と発起人	397
II 1910年の会員および職員構成	400
III 辛亥革命直後の改組と1912年の職員構成	414
IV 1913年以後の湖南省教育会	421
お わ り に	426

は じ め に

教育会という存在が近代中国の地域社会でどのように機能したか、これは近年来の重要なテーマである。近代中国の地方政治における教育界、および法定団体である教育会の重要性は横山英氏によって指摘され⁽¹⁾、その後、高田幸男氏によって江蘇を中心とする教育会研究がすすめられてきた⁽²⁾。近年では大陸においても張偉平氏による専論など、教育会研究が数を増しつつある⁽³⁾。

筆者の関心は、清末に導入された近代的学制が中国社会にいかなる影響をおよぼしたか、という中国近代教育史の主要なテーマの解明にあり、これに対するアプローチとして、湖南省の郷紳層および教職員集団の動向を考察してきた⁽⁴⁾。本稿では、教職員の結集軸としての教育会とくに湖南省教育会に注目する。

湖南省教育会は清末に湖南省長沙で成立した湖南教育総会を前身とする省レベルの教育会で、1930年代まで長期的に活動を続けている（本稿では、1907年の成立時から民国期にかけての同会を「湖南省教育会」と総称するが、とくに成立時から1912年における同会を指す場合は「湖南教育総会」と表記する）。湖南省教育会について特筆すべきは同会の編纂になる教育専門雑誌『湖南教育雑誌』⁽⁵⁾である。同誌は同会の規約や構成員、そ

の活動や湖南教育行政に関する記事を多数掲載し、当時の湖南における教育状況をうかがうことができる貴重な史料である。これまでの教育会研究は先に示したとおり、江蘇省・浙江省など沿海部の事例を主たる対象とし、とくに張偉平氏は民主的・近代的な教育団体としての教育会像を提示している。筆者はこれら先行研究で得られた教育会像を出発点とし、湖南省教育会の実態を多面的に考察することで、近代中国における教育会や教職員集団の実態を解明できると考えている。

湖南省教育会に関する専論は管見の限り皆無であり、比較的詳しいものは、『湖南教育史』第2巻における湖南省教育会の概略である⁽⁶⁾。同書は湖南省でもっとも長期間にわたって存続し、またもっとも影響力のあった教育団体として湖南省教育会をとりあげる。そして、『湖南教育雑誌』などの史料に基づいて、その組織や活動のあらましを描き、湖南の教育近代化に果たした役割を評価している。ただし、同書は同会の構成員の変遷については、各時期における会長・副会長や主な幹事を挙げるのみで、構成員や職員の実像はいまだ明らかではない。今後、湖南省教育会の諸活動やその意味を地域社会のなかに位置づけていくためには、それらが果たしてどのような人々によってなされたかを明らかにする必要があることは言うまでもない⁽⁷⁾。

A. W. マクドナルド氏は清末民初の湖南教育界を、「私立学校と省立学校の対立」という極めて興味深い図式で論じ、譚延闓と胡元倬らが1920年までの湖南省教育会をリードしつづけたと述べる⁽⁸⁾。しかし、先述の『湖南教育史』第2巻によると、1912年から20年にかけての会長は、符定一（1912～15年）・葉德輝（1916年）・陳潤霖（1916～19年）とめまぐるしく交替している。これは、同時期における江蘇省教育会が張謇・黃炎培を、浙江省教育会が經亨頤をそれぞれ中心とし、会長・副会長や主要な職員に大きな変動が見られなかったことと著しい対照をなす。湖南省教育会における会長の変遷は、民国初期の政情不安などが関係しているとみることが出来るが、それ以外にも湖南省教育会ひいては湖南教育界の構成員に内在する要因があるのではなかろうか。つまり、湖南省教育会に結集した人々はどのような経歴を持ち、何を求めて湖南省教育会に結集したのであろうか。そして、湖南省教育会と地方政権とはどのような関係にあったのだろうか。

以上の問題関心により、本稿は1907年から1915年にかけて、すなわち清末から符定一会長時期における湖南省教育会の会員および職員構成の変遷とその要因を考察する。従来、近代的社団や教育会の構成員を分析する際には、開明的紳士・留学生・国内学堂卒業生という枠組⁽⁹⁾が用いられてきたが、本論ではこれに加え、湖南教育界における「派閥」の存在を明らかにするための補助線として、マクドナルド氏が指摘する「私立学校と省立学校の対立」という図式を援用する。

本論は以下の構成をとる。第1章では、湖南教育総会の発起人を考察する。第2章では、1910年の職員選挙における湖南教育総会の会員および職員の構成を考察する。第3章では、辛亥革命直後における改組と、その結果生じた職員構成の変容を考察する。第4章では、1913年の改組と職員構成、および湖南省教育会と湖南省政権との関係を考察する。

I 湖南省教育会の成立と発起人

湖南教育総会は1906（光緒32）年に発起され、1907（光緒33）年に成立した。発起後、湖南全省より260人あまりが集まり、投票によって劉人熙が会長に、曾熙が副会長に当選している。その後、第2回選挙では黄忠浩が会長に、譚延闓が副会長に当選した⁽¹⁰⁾。

まず、湖南教育総会の発起人はどのような人物か、彼らのほとんどは経歴が確認できる。それを開明的紳士・留学生・国内学堂卒業生という従来の枠組をもとに分類したのが、表1である。つまり、発起人は、①光緒新政期における学務支援者、②戊戌変法期から活動が認められる地方紳士、③日本留学経験者、から構成されていることがわかる。また、表の「番号」欄の番号は、後述する1910（宣統2）年の職員当選者（表5参照）に割り振った番号と対応している。これにより、発起人の多くは、1910年においても会の中心人物であることが確認できる。

譚延闓ら発起人の多くが、教育改革から地方自治に参与してのちに立憲派を形成したことは多くの先行研究で明らかである⁽¹¹⁾。これに対して、本稿ではあくまで教育界における側面から発起人のグループを分析しよう。ひとつは、俞蕃同・仇毅ら1902（光緒28）年に巡撫俞廉三が派遣した官費留学生のグループである。彼ら官費留学生が帰国後、湖南教育界に参与していったことはよく知られている。そして、もうひとつ特徴的なグループがある。それが「瀏陽士人グループ」、すなわち湖南省瀏陽県出身の劉人熙・貝允昕・黎尚雯の三者からなるグループである。

清末の瀏陽士人グループに関しては賈維氏の詳細な研究がある⁽¹²⁾。氏の研究は、戊戌変法の中心人物たる譚嗣同に影響を与えた士人のネットワークを解明することに主眼がおかれているが、氏の研究によって明らかとなった瀏陽士人グループの存在は、光緒新政以後の湖南教育界を理解するうえで極めて重要である。以下、氏の研究に依拠しつつ、瀏陽士人グループ、とくに劉人熙と貝允昕の関係を明らかにしよう（以下、頁数の表記は註12のそれを指す）。

瀏陽士人グループは、譚嗣同のいう「瀏陽三先生」すなわち道光年間生まれの劉人熙・歐陽中鵠・涂啓先と、同治年間生まれの譚嗣同・貝允昕・唐才常らという二つの世代から

表1 湖南教育総会発起人

	番号	姓名	本籍	生没年	経歴	参照
①	31	劉人熙	瀏陽	1844-1917	進士。戊戌政変後、改革に参加。1906年中路師範学堂の監督。	上523-524
	34	譚延闓	茶陵	1880-1930	進士。両広総督譚鍾麟の子。1903年明德学堂の支援を皮切りに学務に参加。	上701-705
	33	黄忠浩	黔陽	1859-1911	生員。新軍指揮官、鉞山経営などで知られる。1903年明德学堂の設立を支援。	上561-563
②	2	黎尚雯	瀏陽	1868-1918	生員。譚嗣同らとともに南学会や『湘報』の創設に参加。1900年衡州に逃れる。省城で明德学堂の教職員。革命家禹之謨と惟一学堂を創設。	民1388
	32	曾熙	衡陽	1861-1930	進士。「公車上書」に参加。1905年南路師範学堂の監督。	上575-576
	3	曹典球	長沙	1877-1960	湖南時務学堂に入学。郴州輿算学会の董士に連名(『湘報』12号)。戊戌政変後郴州に逃れる。省城で明德学堂など各学堂の教職員。	下44-45
③	一	俞蕃同	善化	1875-1909	監生。1902年日本へ官費留学。1903年湖南民立第一女学を創設。	上681-682
	13	仇毅	湘陰	?-?	監生。1902年日本へ官費留学。帰国後、各学堂の教員。	最21
	15	廖名縉	瀘溪	1869-?	拔貢。1903年日本留学。帰国後、各学堂の教員。1905年西路公学の設立を支援。	民1339
	一	余肇升	長沙	1871?-?	両湖書院で学習後、日本留学。帰国後、湖南学務処の文案など。	学43期
	16	貝允昕	瀏陽	1865-1929	挙人。1904年日本法政学校に入学。帰国後、中路師範学堂の教務長など。	上592-593

注：参照欄の略号は次のとおり。数字は頁数。

上＝湖南省地方志編纂委員会編『湖南省志 第三十卷 人物志』上冊（湖南出版社、1992年）。

下＝湖南省地方志編纂委員会編『湖南省志 第三十卷 人物志』下冊（湖南出版社、1995年）。

民＝徐友春主編『民国人物大辞典』（河北人民出版社、1991年）。

最＝支那研究会編『最新支那官紳録』（支那研究会、1918年）。

学＝『学部官報』。

なる（18頁）。瀏陽三先生のうち、開明的傾向の持ち主で譚嗣同に協力的であった歐陽中鵠に対して、劉人熙はいわゆる保守的傾向をそなえ、変法に対して批判的であった。そして、譚嗣同と同じく劉人熙の門下生として、そして劉の女婿として、劉と密接な関係を持つのが貝允昕である。彼は劉人熙より王船山の学を授けられ、劉の思想的影響を深くうけて保守的傾向を有し、譚嗣同の行動をいましめたという（113頁、128～129頁）。このように、変法に批判的な立場をとる劉人熙と貝允昕であったが、戊戌政変における譚嗣同の死（1898年）、「庚子の乱」における唐才常の死（1900年）によって考えを変え、ともに

改革に志すようになった（360～363頁）。

このほか、氏の研究にはその名が見えないが、瀏陽県出身で同治7年生まれの黎尚雯も、その経歴から瀏陽士人グループに属しているとみてよからう（表1参照）。彼らは清末湖南の教育界形成、および湖南教育総会の成立に深く関与していたのである。

以上、発起人について考察した。なお、1907年に成立した湖南教育総会がどのような会規約を有し、どのような組織運営を行っていたのか、また実際にどのような活動をしたのか、これらは史料の不足により明らかではない。ただ、1909（宣統元）年までは大きな活動はできなかったのではないかと見られる。

清朝政府は1908（光緒34）年、憲政への準備の一環として、各省政治の議事機関というべき諮議局を各省に開設することを決定した。湖南では譚延闓ら地方紳士が諮議局開設の準備に積極的にに関わり、1909（宣統元）年11月に湖南諮議局が開会した。このような湖南紳士の政治意識の高揚に呼応して、湖南教育総会は湖南紳士から寄付を募り、専用の会場建築に着手した⁽¹³⁾。そして1910年7月（宣統2年6月）に全省大会を開催したのである⁽¹⁴⁾。

筆者は湖南教育総会の構成員を分析するうえで、この1910年の全省大会に着目する。その理由は2つあげられる。ひとつは、この時期に同会は会員名簿を作成しているため、これによって同会の会員に対する分析が可能となることである。筆者はこれまで、清末から民国期にかけての湖南省教育会に関する史料を収集してきたが、管見の限り会員全員の一覧表が存在するのは、この1910年と1920年代のみである。すなわち、1910年の会員構成の分析は、同時点における湖南教育総会の会員状況を明らかにするためのみならず、民国初年における会員および職員構成の変容を推測するうえでも非常に重要になるのである。

そして、もうひとつの理由は、「三百数十人」が参加したというこの全省大会では、投票によって「幹事」30人が選出され、その全員の姓名が判明していることである。ここから、湖南教育総会は会長・副会長のほか、職員として幹事をおいたこと、そして幹事の選出は会員の投票によることがわかる。湖南教育総会の幹事がどのような職務を担っていたかは明らかではないが、他省の教育総会を参考にすると、日常業務をはじめ会運営の中核を担っていたと考えられる⁽¹⁵⁾。つまり、幹事に当選するということは、会運営を任せるに足る湖南教育総会の重要人物として、会員に支持されていることを意味する。ここに、清末における湖南教育総会の性質を理解するうえで、1910年の幹事を分析することが極めて重要となる。

以上の理由により、次章では1910年における湖南教育総会の会員および職員構成を分析する。

長沙県（101人）と善化県（71人）が首位・2位を占め、湘潭県（45人）がそれに次ぐ。湖南省は長沙に政治・経済・文化が一極集中していることはよく知られるが、人材の面でもあてはまるとみてよい⁽¹⁶⁾。ここで、湖南における地域間対立、いわゆる「路界問題」について言及しておかなければならない。「路界」とは、清末の湖南巡撫趙爾巽が制定した学区のことで、表2のとおり中路・西路・南路の三路に分かれる⁽¹⁷⁾。この三路の間では政治・経済・文化など各方面における格差が大きかったため、路界間の格差是正を訴える「路界問題」が教育のみならず政治や経済の分野でもたびたび火種となった。学区としての路界は辛亥革命後に廃止されたが、路界の観念は民国期を通じて湖南人の間に根強く残り続けたのである。湖南教育総会を見ても、表2のとおり中路の会員数が西路・南路を大きく引き離していることは明かである。ここでは、清末から民国期にかけての湖南省教育会における「路界問題」には留意する必要があることを指摘しておきたい。

また、一般会員の住所・連絡先についていえば、実のところほとんどの会員は連絡先欄が空欄のままである。かわりに多くの会員は、住所欄に住所ではなく学堂名や機関名を記している。この住所欄・連絡先欄によって、各会員と各学堂もしくは各機関とのつながりを知ることが出来る。これをまとめたものが表3である。表の項目は学堂関係者（なんらかの学堂名を記してあるもの）・立憲団体（諮議局・自治公所・自治研究所・商務總會）・行政機関（勸業公所・禁煙所・勸学所・学務公所・塩署・機器印刷局）・その他・住所（現住所を記してあるもの）・不明（空欄）からなる。ここで注意しなければならないのは、住所欄・連絡先欄に記載されているのは各会員が自らの連絡先に指定した場所であって、あくまで所属先の目安にすぎない、ということである。一人の人物は往々にして複数の側

面を有しているものであり、発起人を例にすると、黎尚雯は学堂関係者であり諮議局議員でもあるが、住所欄には学堂名を記載している。また、譚延闓は諮議局議員でもあったが、住所欄には現住所を記載しており、貝允昕は学堂関係者でもあったが、住所欄には諮議局と記載している、という具合である。このため、この表から指摘できることは、湖南教育総会会員の少なくとも半数は学堂関係者でもあり、立憲団体の関係者なども含まれている⁽¹⁸⁾、ということに止まる。

先に、ばく然と「学堂関係者」と称したが、清朝が公布した「教育会章程」によると、学生の入

表3 住所・連絡先別

場所	人数（人）	比率（％）
学堂関係者	276	53.28
立憲団体	38	7.34
行政機関	9	1.74
その他	6	1.16
住所	152	29.34
不明	37	7.14
合計	518	100.00

出典：『湖南教育総会会員一覧』より
作成。

会は認められていない⁽¹⁹⁾ ため、彼らはいずれも学生ではないとみてよい。それでは、学堂関係者はその学堂とどのような関係にあるのだろうか。これについては別の史料を用いて補足しよう。それは、『宣統庚戌年湖南高等学堂同学録』（以下、『高等同学録』）および『湖南優級師範学堂同学録』（以下、『優師同学録』）である⁽²⁰⁾。前者は湖南官立高等学堂（1903年設立）の、後者は湖南官立優級師範学堂（1908年設立）の、1910年前後における教職員および在學生の一覧表である。両史料とも、教職員・在學生のそれぞれについて、役職（教職員のみ）・姓名・別号・年齢・本籍・住所・連絡先の各項目からなる。

まず『会員一覧』と『高等同学録』を比較する。『会員一覧』の住所欄に「高等学堂」と記している者は12人いる。このうち6人は『高等同学録』の教職員として記されていることから、彼らは現職教職員であることがわかる。同様に『会員一覧』と『優師同学録』を比較すると、『会員一覧』の住所欄に「優級師範学堂」と記している者17人のうち、15人が『優師同学録』に教職員として記されている。もちろん、それぞれの史料の作成時期が必ずしも同一ではないことを考慮する必要があるが、これらの作業により、学堂関係者とは、1910年時点における該学堂の現職教職員である可能性が高いとみてよい。また、そうでない場合は、該学堂の卒業生もしくは教職員歴を有する者と考えられよう。後ほど、この学堂関係者を対象に改めて考察を加えることにする。

以上、一般会員の分布に関する分析を行った。ここからは、会員間のつながりを解明するためのアプローチを試みよう。彼ら一般会員のなかで有力者は果たして誰かといえば、先述のとおり1910年の全省大会で選出された幹事30人であると考えられる。ここに筆者は、なぜ彼ら30人が幹事に当選したのか、という問いを発することで、湖南教育総会における勢力分布を明らかにしたい。

まずは、幹事30人の経歴、とくに教職員歴に注目する。経歴については各種の人物辞典を用いるほか、教職員歴に関しては新たな史料を用いる。それは、1905（光緒31）年および1907（光緒33）年における湖南省城各学堂の教職員名簿である『乙巳年終在省各学堂職員教員調査録』・『丁未年終在省各学堂職員教員調査録』（以下、それぞれ『乙巳』、『丁未』と表記）である⁽²¹⁾。これらによって、彼らが果たしていつごろから教職員を務めているのか、人物辞典ではあらわれにくい教職員歴を明らかにできる。

まず、幹事30人のうち経歴が判明する者を、発起人の①～③の分類に即して配置したものが表4、そして表4をもとに、正副会長・幹事について、『乙巳』・『丁未』の教職員歴をあわせて配置したものが表5である。表4および表5では、発起人の①～③に加え、④・⑤が新たに加わる。④は国内学堂卒業生、⑤は経歴が判明しなかった者である。④について、光緒新政期、国内に各種学堂が設立されると、学生達はそこで近代教育を受容した。

表4 1910年湖南教育總會幹事 経歴判明者

	番号	姓名	本籍	生没年	経歴	参照
①	1	龍璋	攸県	1854-1918	挙人。郷紳龍湛霖の子。1894年より江蘇省各県の知県。1907年より湖南で実業参与。	上540-542
②	4	易宗夔	湘潭	1874-?	原名は鼎。南学会・『湘報』に参加。戊戌政変後、日本へ留学し、法政学校に入学。	上595-596
	5	辜天佑	長沙	1875?-?	湖南時務学堂で学習、南学会に参加（『湘報』22、54、66号）。	最580
	6	張翼雲	善化	1875?-?	『湘報』57・95号に論説掲載。湖南師範館卒業（『湖南教育雑誌』1-2、記録、本省教育界状況）	—
	7	熊崇煦	南州	1873-?	附生。『湘報』30・42・49号に論説掲載。日本早稲田大学師範部に留学。卒業後帰国。	民1355
	8	歐陽鼎	郴州	1869?-?	郴州興算学会董士（『湘報』12号）。1906年南路公学の設立を支援（鄒欠白『長沙市指南』再版、和濟印刷公司、1935年、第3章第1節丙、15、私立獄雲中学校）。	—
	9	王達	善化	1872?-?	附生。両湖書院で学習後、両湖文高等学堂の教員。1903年明德学堂開学時の教員。	学43期
③	10	俞誥慶	善化	1879?-1927	挙人。1902年日本へ官費留学。帰国後、湖南師範館の監督、長善学務処の総文案など。	上742-744
	11	胡元俟	湘潭	1872-1940	拔貢。1902年日本へ官費留学。1903年龍璋・黄忠浩らと民立明德学堂を創設。	上643-645
	12	陳潤霖	新化	1879-1946	生員。1902年日本へ官費留学。1906年民立楚怡学堂を創設。	下55-56
	14	周家純	寧郷	1883-1932	1902年日本へ私費留学。帰国後、寧郷学堂速成師範班の教員。1905年周氏家塾を創設。	下96-98
	17	何衢	湘潭	1871-1947	廩生。日露戦争後、日本に留学。1906年より明德学堂の教員（『明德校史』1906年の条）。	上634-635
	18	彭施滌	永順	1869-1947	日本に留学？（民1091と食い違いあり。）	上618-619
④	19	彭国鈞	安化	1877-1952	1903年明德学堂速成師範科に入学。卒業後、修業学堂の教員（のち校長）。	下36-38
	20	徐特立	善化	1877-1968	1905年寧郷学堂速成師範班に入学。卒業後、梨江高小を創設。1906年より周氏家塾の教員。	下29-31
	21	姜濟賓	長沙	1879-1935	寧郷学堂速成師範班を卒業後、各学堂の教員。のち立憲派。	下50-51

注1：番号欄の番号は、表5の番号欄の番号と対応している。

注2：参照欄の略号は次のとおり。数字は頁数。

上＝『湖南省志 第三十卷 人物志』上冊。下＝『湖南省志 第三十卷 人物志』下冊。民＝『民国人物大辞典』。最＝『最新支那官紳録』。学＝『学部官報』。いずれも前掲。

表5 1910年湖南教育総会職員

(1) 正副会長 (1907年は劉人熙・曾熙、1910年は黄忠浩・譚延闓)

	番号	姓名	本籍	年齢	1905年	1907年	1910年	参照
①	31	劉人熙	瀏陽	57		一 / 瀏陽 (監督) / 中路師 (監督)		上 523-524
	32	曾熙	衡山	50		一 / 一 / 高等 (監督)		上 575-576
	33	黄忠浩	黔陽	51				上 561-563
	34	譚延闓	茶陵	32	明德 (総理) / 一 / 中路師 (監督)	明德 (総理)・経正中 (主弁) / 一 / 一		上 701-705

(2) 幹事

	番号	姓名	本籍	年齢	1905年	1907年	1910年	参照
①	1	龍璋	攸県	57	経正 (主弁) / 一 / 一	経正 (主弁) / 一 / 一		上 540-542
②	2	黎尚雯	瀏陽	43	経正 (教務) / 一 / 一	広益 (監督) / 瀏陽 (庶務) / 中路師 (斎務長)	高等実	民 1388
	3	曹典球	長沙	33	明德 / 一 / 求忠・実業	経正 / 一 / 求忠・高等実	高等実	下 44-45
	4	易宗夔	湘潭	36	明德・経正 / 一 / 求忠	一 / 安化中 / 高等・中路師	湘潭	上 595-596
	5	辜天佑	長沙	35	修業 / 長沙師・寧郷・邵陽 / 一	明德・周氏 / 善化・寧郷・安化 / 一	修業	最 580
	6	張翼雲	善化	35	一 / 湘陰 / 師範伝習所ほか	経正 / 湘郷・邵陽・武岡・湘陰 / 一	経正	湖雑 1-2
	7	熊崇煦	南州	37			楚怡	民 1355
	8	歐陽鼎	郴州	41		明德 / 一 / 高等実		一
	9	王達	善化	38	明德ほか / 湘陰ほか / 中路師ほか	一 / 長沙府 / 求忠・中路師・高等実		学 43期
	10	俞誥慶	善化	45	一 / 一 / 善化高 (監督)ほか			上 742-744
③	11	胡元俟	湘潭	38	明德 (監督)・経正 (監督) / 一 / 一	明德 (監督)・経正 (主弁) / 一 / 一	明德	上 643-645
	12	陳潤霖	新化	30		楚怡 (堂長)・経正 / 一 / 一	楚怡	下 55-56
	13	仇毅	湘陰	27	明德・経正・修業 / 湘陰 / 求忠	経正 / 一 / 求忠・中路師・高等実		最 21
	14	周家純	寧郷	28	楚材小 / 寧郷 / 一	周氏 (主任) / 寧郷 / 一		下 96-98
	15	廖名縉	瀘溪	39		明德 (監督) / 一 / 中路師・法政		民 1339、最 650

清末民初における湖南省教育会の職員構成とその変容

	16	貝允昕	瀏陽	46		一 / 瀏陽 (教務) / 中路師 (教務長)・法政		上 592-594
	17	何衢	湘潭	41			明德	上 634-635
	18	彭施滌	永順	41				上 618-619
④	19	彭国鈞	安化	33	修業 (文案) / 一 / 一	修業 (堂長) / 安化 (庶務・学監) / 一	修業	下 36-38
	20	徐特立	善化	38		修業・周氏 / 湘潭 / 一	江蘇教育總會	下 29-31
	21	姜濟賓	長沙	31		周氏 / 善化・寧郷・湘郷 / 一		下 50-51
	22	鄭寅亮	邵陽	30	一 / 邵陽 (会計・文案) / 一		中路師	湖雜 1-2
	23	劉剴	邵陽	27			中路師	中師表
	24	王国鼎	湘郷	27			中路公学	中師表
⑤	25	周蘭本	寧郷	47		周氏 (監督) / 西路公 / 一	周氏	一
	26	胡子清	湘郷	40		一 / 一 / 法政 (副監督)	法政	一
	27	周大烈	湘潭	48			自治籌弁処	一
	28	曹世昌	長沙	42				一
	29	呉其林	武陵	32				一
	30	袁騷	清泉	34				一

注1：教職員歴の並びは、私立 / 公立 / 官立学堂の順。学堂名のみは教員、学堂名に（ ）がつくものは職員を示し、（ ）内は職名。

注2：年齢は『会員一覧』よりそのまま引用。劉人熙・曾熙・貝允昕は空欄のため生年より算出。

注3：参照欄の略号は次のとおり。数字は頁数。

上 = 『湖南省志 第三十卷 人物志』上冊。下 = 『湖南省志 第三十卷 人物志』下冊。民 = 『民国人物大辞典』。最 = 『最新支那官紳録』。学 = 『学部官報』。湖雜 1-2 = 『湖南教育雑誌』第1年第2期、記録、本省教育界状況、1912年7月1日発行。中師表 = 『中路師範学堂職員教員学生姓氏表』。

出典：「湖南教育總會建築告成」『教育雑誌』2-6、記事、1910年7月16日発行、『湖南教育總會会員一覧』、『乙巳年終在省各学堂職員教員調査録』、『丁未年終在省各学堂職員教員調査録』より作成。

そして、とくに師範教育を受けた学生が、卒業後は教育界に参入したのである。従来の枠組に基づけば、表5にみられるとおり、湖南教育総会の職員は他の近代的社団と同様に、開明的紳士・留学生・国内学堂卒業生によって構成されていることがわかる。これに加え、本稿の分析視角により、さらに湖南教育総会の構成員を分析したい（以下、幹事名に番号を付記。表5の番号欄の番号に対応する）。

前稿では、民立学堂（以下、私立学堂と表記）教職員、という切口によって、1910年幹事のほぼ半数が私立学堂教職員経験者であることを指摘した。詳細は前稿をお読みいた

だきたいが、具体的には、11. 胡元俛の明德学堂・経正学堂（ともに1903年設立、以下同じ）、19. 彭国鈞の修業学堂（1904年）、14. 周家純の周氏家塾（1905年）、12. 陳潤霖の楚怡学堂（1906年）という私立学堂を中心とするグループである。これらはいずれも清末のみならず民国期を通じて湖南に影響力を有したとされる近代校である⁽²²⁾。前稿ではこれら私立学堂と教職員の関係を分析し、湖南教育総会幹事の構成に言及した。その一方で、私立学堂の分析のみでは不十分であることもまた明らかである。というのも、表5のとおり、彼らは私立学堂のみならず、官立・公立の学堂でも教職員を務めていたからである。よって、本稿では官立・公立学堂を含めた考察を試みる。

一般会員518人のうち、なぜ表5の30人が幹事に当選したか。もっとも単純な答えは、比較的多数の会員から票を得たから、であろう。それでは、彼ら幹事はそれぞれどのような会員とつながりを持っていたか。会員間の関係を分析するための手がかりとなるのが、『会員一覧』の「紹介者」の項目である。清朝政府の規定では、教育会の会員になるためには入会の際に1人もしくは2人の紹介者が必要とされた。そのため『会員一覧』には「紹介者」の項目があり、本稿で用いる他の名簿史料と異なる特色となっている。紹介者、つまり会員を紹介する側の人物は、被紹介者、つまり紹介される側の人物よりも湖南教育総会の中心に近い関係にあると考えられよう。よって、一般会員における紹介・被紹介の関係から、湖南教育総会の人間関係を考察する。

まずは、紹介者について、単純に紹介した人数の多さという側面から考察しよう。一般会員518人はそれぞれ1人もしくは2人の紹介者を有しているため、紹介者ののべ人数は601人となる。そして、紹介者の異なり人数は108人である。では、108人の紹介者はそれぞれ何人の会員を紹介したか。紹介数の多い順に紹介者を並べたものが表6である。繁雑さを避けるため、1910年職員のみ姓名を表記した。

幹事当選者と紹介数の関連をみるに、4. 易宗夔・2. 黎尚雯をはじめ紹介数の多い紹介者が幹事に当選したのは妥当であるといえる。とくに、4. 易宗夔から3. 曹典球までの上位10名は表5の経歴をみても、早くから湖南で教職員を務めている。ここから、教職員歴が長いものはそれだけ会員との人脈を有しており、幹事当選に結びついたと考えられる。

次に、単に紹介数のみならず、紹介者の活動基盤について初歩的な考察を試みたい。具体的には、会員のうち先述の学堂関係者のみを対象に、各学堂における会員の分布、および紹介者との関係を考察する。各学堂ごとの会員数、および彼らの紹介者の分布を表したものが表7である。表7を作成するにあたってどのような処理を行ったか、官立高等教育機関である高等学堂および優級師範学堂を例に説明しよう。

まず、高等学堂についていえば、住所欄に高等学堂と記載した会員は12人で、彼らに

表6 紹介者・紹介数

紹介者	紹介数（人）	合計（人）
4. 易宗夔	86	86
2. 黎尚雯	54	54
11. 胡元倓	47	47
16. 貝允昕	42	42
15. 廖名縉	27	27
34. 譚延闓	24	24
26. 胡子清	23	23
14. 周家純	15	15
1人	13	13
3. 曹典球	12	12
2人	10	20
10. 俞誥慶など3人	9	27
8. 歐陽鼎・12. 陳潤霖・28. 曹世昌	8	24
1. 龍璋・7. 熊崇煦など5人	7	35
13. 仇毅など2人	6	12
19. 彭国鈞・31. 劉人熙など3人	5	15
18. 彭施滌・27. 周大烈	4	24
10人	3	30
30. 袁驩など17人	2	34
17. 何衢・22. 鄭寅亮・25. 周蘭本など37人	1	37
不明	9	—
紹介者のべ人数合計	—	601

注1：合計欄は、（紹介者の人数）×（紹介数）。

注2：紹介数0人の幹事は次のとおり。

5. 辜天佑、6. 張翼雲、9. 王達、20. 徐特立、21. 姜濟寰、23. 劉劉、24. 王国鼎、29. 吳其林。

出典：『湖南教育総会会員一覧』より作成。

対する紹介者ののべ人数は12人、つまり会員1人につき紹介者は1人ずつであることを意味する。そして、紹介者のうちもっとも多くを会員を紹介した者が張登壽で、彼一人で9人の会員を紹介していることがわかる。彼には※印がついているが、これは彼自身も高等学堂に所属していることを示す。では、張登壽は誰とつながりがあるか、すなわち張登壽の紹介者は誰かという点、11. 胡元倓である。以上により、高等学堂の学堂関係者は張登壽、さらには11. 胡元倓とのつながりが深いとみなすことができる。次に、優級師範学

表7 学堂別

(1) 省城官立学堂

種別		学堂名	会員数 (人)	紹介者のべ 人数 (人)	紹介者	紹介数 (人)	紹介者 ¹
高等	高等・専門	高等学堂	12	12	張登壽 *	9	胡元俠
		法政学堂（官・紳の2所）	13	16	胡子清 *	11	—
		景賢法政学堂					
		成德法政学堂					
		達材存古学堂	3	3	張嗣森	2	廖名縉
					廖名縉	1	—
		医学堂					
	実業	高等実業学堂	10	10	黎尚雯 *	5	—
					曹典球 *	3	—
	師範	優級師範学堂	17	25	周大椿 *	9	易宗夔
					易宗夔	7	—
					伍任鈞 *	2	貝允昕
					貝允昕	1	—
中等	中学	長沙府中学堂	3	3	張燦	3	易宗夔・曹世昌
		求忠中学堂	7	14	曾広策 *	5	易宗夔・仇毅
					易宗夔	5	—
					仇毅	2	—
					曹世昌	2	—
	実業	中等工業学堂	8	15	呉家駿 *	6	易宗夔・胡元俠
					易宗夔	3	—
					龍基渭 *	2	譚延闓
		中等農業学堂	3	3	瞿璉霖	3	曹典球
	師範	中路師範学堂	20	20	貝允昕	17	—
初等	初小・高小	長沙初等小学堂（25所）	2	2	余肇升	1	易宗夔
		長沙選升小学堂	4	4	余肇升	2	易宗夔
					曹典球	2	—
		善化初等小学堂（18所）	4	4	皮嘉祐	3	胡元俠
	実業	善化初等芸徒学堂	4	4	皮嘉祐	2	胡元俠
幼児	蒙養院	3	5	曹世昌	2	—	

(2) 省城公立学堂

種別		学堂名	会員数 (人)	紹介者のべ 人数 (人)	紹介者	紹介者 (人)	紹介者'
高等	実業	高等铁路学堂	9	10	易宗夔	2	—
					呉劍佩 *	2	易宗夔
					龍璋	2	—
					文斐 *	2	胡元俠
		高等巡警学堂	2	3	譚延闓	1	—
					黎尚雯	1	—
					呉家駿	1	易宗夔
中等	中学	中路公学	7	7	易宗夔	6	—
		南路公学	9	9	歐陽鼎	7	—
		西路公学	5	8	廖名縉	5	—
		善化中学堂	6	6	龔雲翥 *	5	易宗夔
		湘潭中学堂	9	9	易宗夔 *	8	—
		湘陰中学堂	2	2	仇道南	2	易宗夔
		寧郷中学堂	6	8	王鳳昌 *	3	易宗夔
					易宗夔	3	—
					周家純	2	—
		瀏陽中学堂	6	6	黎尚雯	6	—
		湘郷中学堂	3	4	易宗夔	1	—
					呉劍佩	1	易宗夔
					周煦埏	1	易宗夔
		安化中学堂					
		益陽中学堂					
		武岡中学堂	8	10	舒超俊 *	4	易宗夔
					曹齡瑞	2	易宗夔・曾広策
					曾広策	2	易宗夔・仇毅
					易宗夔	1	—
		邵陽中学堂	7	7	胡元俠	2	—
					賀民範 *	1	胡元俠
					譚延闓	1	—
					楊思九 *	1	譚延闓
	実業	鉅務学堂	2	2	彭樾 *	1	陳国鈞
					陳国鈞 *	1	彭樾
初等	高小	長沙県学堂	10	10	余肇升 *	8	易宗夔
		善化高等小学堂					
	実業	陸軍小学堂	5	6	湯魯璠	4	譚延闓

(3) 省城私立学堂

種別		学堂名	会員数 (人)	紹介者のべ 人数 (人)	紹介者	紹介数 (人)	紹介者'
中等	中学	明德学堂	22	22	胡元俔 *	20	—
		經正学堂	5	5	仇道南	5	易宗夔
		修業学堂	4	5	彭国鈞 *	2	—
					易宗夔	2	—
	実業	広益学堂	2	2	黎尚雯	2	—
		私立中等工業学堂	2	2	易宗夔	2	—
	師範	周氏家塾	10	10	周家純	10	—
		思益学堂	3	3	易宗夔	3	—
初等	初小	楚怡学堂	5	8	陳潤霖 *	4	—
					熊崇煦 *	3	—

(4) 省城外、もしくは所在地・種別不明の学堂

種別		学堂名	会員数 (人)	紹介者のべ 人数 (人)	紹介者	紹介数 (人)	紹介者'
官	中	醴陵磁業学堂	1	2	許炳元	1	譚延闓
					黄忠統	1	周大烈
公	中	永州府中学堂	1	1	曹典球	1	—
私	中	江華凝香師範学堂	1	1	俞蕃同	1	不明
私	初	邑南五区十都圭峯学堂	1	1	龔雲翥	1	不明
私	初	王氏家塾	1	1	胡元俔	1	—
?	中	衛清中学堂	2	2	胡元俔	1	—
					曹典球	1	—
?	中	実科中学堂	1	1	易宗夔	1	—
?	中	城内女子師範学堂	1	1	廖名縉	1	—
?	中	南雲中学堂	3	4	龍璋	2	—
					胡元俔	1	
					黎尚雯	1	
?	初	長邑小学堂	1	2	黎尚雯	1	—
					曾広策	1	易宗夔・仇毅
?	?	貞裔学堂	1	1	易宗夔	1	—

注1：紹介者の*は、紹介者本人がその学堂に所属していることを示す。

注2：紹介者'は紹介者の紹介者を示す。紹介者が幹事の場合、紹介者'は一とする。

出典：『湖南教育総会会員一覧』より作成

(参考) 1909年 湖南全省学堂数

種別	学堂数	教員数
高等・専門	7 (7)	64
実業 (高・中・初等)	17 (9)	160
優級師範 (高等)	1 (1)	25
初級師範 (中等)	15 (3)	142
中学	47 (19)	468
小学・蒙養院	1154 (48)	3855
合計	1241 (87)	4714

注：学堂数欄の () 内は表7 (1) ～ (3) 各学堂の合計。

出典：陳啓天『最近三十年中国教育史』、93-100頁、109-114頁、123-127頁、132-134頁・附表、149-152頁・附表。

堂についていえば、会員数17人に対して紹介者のべ人数は25人、すなわち8人の会員は紹介者が2人いることを意味する。紹介者は、同学堂に所属する周大椿がもっとも多く、4. 易宗夔・伍任鈞と次ぐ。そして、周大椿と伍任鈞の紹介者はそれぞれ4. 易宗夔・16. 貝允昕である。よって、優級師範学堂の学堂関係者は周大椿や伍任鈞、さらには4. 易宗夔・16. 貝允昕とのつながりが深いとみなすことができる。

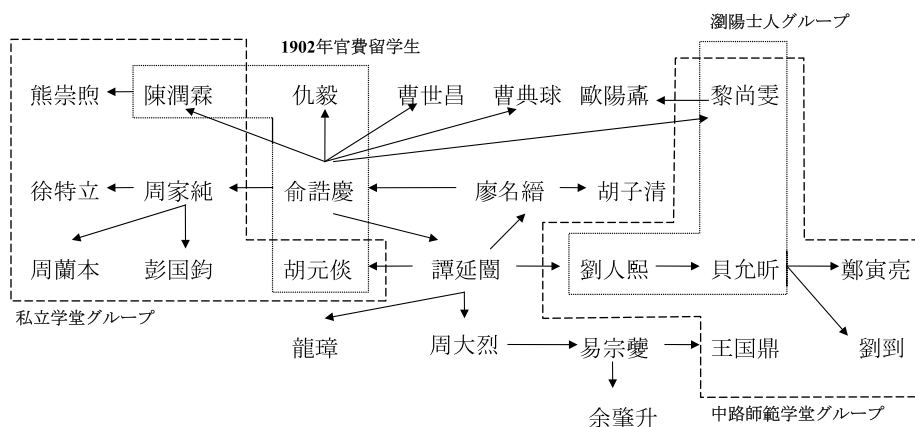
表7は会員のうち学堂関係者のみに絞った限定的なものだが、それでも湖南教育総会の会員は官公私を問わず省

城を中心とする各学堂に広く分布していることがわかる。とくに、官立学堂についていえば、高等学堂 (張登壽、教務長)・法政学堂 (26. 胡子清、副監督)・優級師範学堂 (周大椿、教務長)・高等実業学堂 (3. 曹典球、副監督) はいずれも官の任命になる監督 (現在の校長にあたる) ではなく、実質的に学堂を取り仕切る職務の担当者が積極的に紹介していることがうかがえる。また、各学堂の会員と紹介者との関係をみると、4. 易宗夔が各種学堂の関係者をひろく紹介している一方で、数人の紹介者は独自の拠点を持つことがわかる。すなわち26. 胡子清 (法政学堂)、16. 貝允昕 (中路師範学堂)、15. 廖名縉 (達材存古・西路公学)、8. 歐陽鼎 (南路公学)、2. 黎尚雯 (高等実業学堂・瀏陽中学堂)・28. 曹世昌 (蒙養院)・3. 曹典球 (高等実業学堂・中等農業学堂) および各私立学堂の監督たちである。彼らは自らの拠点とする学堂の関係者を紹介したとみてよい。

ここまで、紹介数と各学堂の会員分布からみた、紹介者と各会員とのつながりを分析した。これにより、主要な幹事の支持基盤が明らかになった一方で、表6注に示したとおり、会員の紹介数が少ないか、もしくはまったく紹介していない者も幹事に当選していることもわかる。彼らのうち、表5①に分類した5. 辜天佑・6. 張翼雲・9. 王達らについては、たとえ自らによる紹介数が少ないとしても、教育界における知名度が高いことで当選したと考えることができるほか、単純な紹介数の多寡以外にも幹事に当選するための要因があるとみてよい。

先に紹介者108人に言及したが、彼らの「紹介者」欄にもまた紹介者が記されている。

図 紹介者・被紹介者相関図



そこで、紹介者同士における紹介・被紹介の関係をたどっていくと、図のようになる。つまり紹介・被紹介の関係は、10. 俞誥慶・15. 廖名縉・34. 譚延闓という三角形を中心として各方面に広がっていることがわかる。この図に沿ってグループの存在を確認すると、ひとつは先述の1902年の湖南官費留学生、すなわち10. 俞誥慶・11. 胡元倓・12. 陳潤霖・13. 仇毅からなるグループがある。生員を中心としていた彼ら官費留学生のなかで、挙人として、また最年長者としてもっとも立場が高かったのが10. 俞誥慶である。そして、この官費留学生たちから派生するのが、私立学堂グループである。とくに7. 熊崇煦・20. 徐特立・25. 周蘭本らは先述の著名な私立学堂を活動拠点として、教育界の支持を得たとみてよからう。

そして、もうひとつ特徴的なグループがある。それは、31. 劉人熙・16. 貝允昕・2. 黎尚雯ら瀏陽士人グループを中核として、22. 鄭寅亮・23. 劉剏・24. 王国鼎からなる集団である。彼らはどのような関係かという、中路師範学堂の教職員経験者およびその卒業生、すなわち「中路師範学堂グループ」と呼ぶべきグループである。ここで中路師範学堂について説明しておく、中路師範学堂とは長沙に設けられた官立師範学堂である。もとは湖南師範館（1902年設立）であったが、湖南巡撫趙爾巽によって学区が分けられた際、中路・南路・西路のそれぞれに師範学堂を設けることとなり、中路師範学堂へと改められた。この中路師範学堂には、1907年時点における教職員および在学生の名簿が存在する。それが『中路師範学堂職員教員学生姓氏表』（以下、『中師表』）⁽²³⁾ である。これによって、瀏陽士人グループと中路師範学堂卒業生のつながりを確認しよう。

まず、瀏陽士人グループについていえば、31. 劉人熙が1906年に中路師範学堂監督に任命されたが、『丁未』と『中師表』のいずれにおいても、1907年時点で16. 貝允昕が教務

長（教務に関する主任）、2. 黎尚雯が斎務長（学生の生活管理に関する主任）と、いずれも学堂の要職を担当していたことを確認できる。この三者が一堂に会した経緯は明らかではないが、同時期の公立瀏陽師範学堂においても三者が要職に就いている（表5参照）ことから、それが偶然ではないことが推測できる。

次に、22. 鄭寅亮・23. 劉剏・24. 王国鼎についていえば、22. 鄭寅亮は民国初期の経歴では中路師範卒業とあるが『中師表』にはその名が見えず、また表5によると早い時期に教員を務めていることから、1904年から1905年に速成科（半年程度の速成コース）を卒業したとみられる。そして、23. 劉剏・24. 王国鼎は、まさに31. 劉人熙の任期（1906年10月～1908年10月）に中路師範学堂に在学していた。『中師表』によると、1907年当時、速成科1班68人および優級選科（中等教育機関の教員養成コース）4班216人の学生が在学しており、23. 劉剏・24. 王国鼎はいずれもこのときの優級選科生である。速成科は6ヶ月程度で卒業したほか、優級選科4班のうち歴史地理班（1907年当時45人）・物理化学班（同53人）の学生は1909年に卒業した⁽²⁴⁾。つまり、23. 劉剏・24. 王国鼎は1910年時点では教職員歴が比較的短いといえる。なぜ中路師範学堂グループのなかで彼ら2人が幹事に当選したか、という理由は、現時点では明らかではない。ただ、ともかくも彼らが幹事に当選できた要因のひとつとしては、会員中における中路師範学堂卒業生の割合が考えられる。というのも、『会員一覧』および『中師表』によると、上述の速成科68人および優級選科2班98人のうち、速成科10人、優級選科26人が会員であることが確認できるのである。1910年の幹事選挙において、「三百数十人」の参加者のうちから幹事30人を選出するとき、最大で36人という勢力はたいへん大きいと考えられよう。

以上、幹事30人が当選した理由を問うことを通じて、湖南教育総会の構成員を考察した。これらから明らかになったのは以下の通りである。まず、従来の枠組である開明的紳士・留学生・国内学堂卒業生という分類に基づく、1910年職員は開明的紳士・留学生の比率が高い。また、国内学堂卒業生については、師範速成科の卒業生のほか、1909年には優級選科の卒業生も教育界に参入し、徐々に湖南教育総会に影響力を持ちはじめていた。

一方、本稿の枠組である私立・官立（省立）という活動拠点による分類に基づけば、1910年職員のなかから大きく2つのグループの存在が確認できた。ひとつは私立学堂グループ、そしてもうひとつは中路師範学堂グループである。私立学堂グループはその多くが光緒新政当初より学務に参与し、宣統年間には教育界に確固たる地位を築いていたとみられる。一方で、中路師範学堂グループは31. 劉人熙・16. 貝允昕・2. 黎尚雯ら瀏陽士人グループを中核とし、同学堂の卒業生で構成されていた。彼らのなかには、23. 劉剏・24. 王国鼎ら教職員歴が比較的短い者も含まれていた。彼らが当選できたのは、同じく中路師

範学堂卒業生の投票になるものと考えられる。

政治的側面からいえば、清末の湖南教育総会は34. 譚延闓を中心とする立憲派の支持基盤のひとつであり、1909年に開会した湖南諮議局において、湖南教育総会は清朝政府に対して、湖南教育界人士の教育要求を表明していた⁽²⁵⁾。それでは、辛亥革命によって清朝が崩壊したあと、湖南教育総会の職員構成はどのように変容したか。次章で検討しよう。

Ⅲ 辛亥革命直後の改組と1912年の職員構成

1911年10月10日（宣統3年8月19日）に武昌起義が勃発すると、湖南省はこれに呼応して10月22日に軍政府成立を宣言、翌日には中華民国湖南軍政府都督府にあらため、その下に軍政・民政兩部を置いた。そして10月31日には譚延闓が都督に就任した。このような状況下において、湖南教育界人士は新たに「中華民国湖南教育総会簡章」（全23条、以下「簡章」と表記）を制定、1912年1月に「中華民国湖南教育総会」への改組を執行し、符定一なる人物が臨時正会長に選出された。

このたび改組された湖南教育総会に関して、注目すべき点が2つある。ひとつは臨時正会長に当選した符定一という人物である。符定一（1877-1958）、字宇澄、衡山県の人で、1909年に京師大学堂師範科（後述）を卒業後、順天高等学堂などで英文教員を務めたという⁽²⁶⁾。彼は1910年の『会員一覧』にはその名が見えず、彼が湖南に戻ってきたのは辛亥革命前後であったと思われる。なぜ、符定一が会長に当選することができたのか。また、冒頭で触れたとおり、マクドナルド氏は、胡元倬および譚延闓は1920年まで湖南の教育界および教育会をリードしたと述べるが、果たして辛亥革命後、彼らや私立学堂グループは湖南教育総会でどのような位置を占めるのであろうか。

そしてもうひとつは、多賀秋五郎氏が指摘するとおり、辛亥革命直後の1912年1月という全国的に見てもきわめて早い時期の改組である⁽²⁷⁾。このときの全国的な政治状況としては、清朝政府と南京臨時政府が対峙しており、湖南省が属していた南京臨時政府は教育会に関する章程を公布していなかった。それにも関わらず、湖南教育界人士は早々に改組を計画し、湖南都督譚延闓の批准を得て中華民国湖南教育総会を成立させたのである。実のところ、「簡章」は、会の目的を「教育の改良および拡充を図り、共和の程度を高めること」とするほか、活動内容その他に関しては、清末の「教育会章程」と大きな差があるわけではない⁽²⁸⁾。それでは、なぜ湖南教育界人士はこのように急な改組を行ったのであろうか。以上の問題を解明するために、まずは1912年1月の改組によって、符定一のほかにどのような職員が当選したのかを明らかにしたい。

表8 1912年中華民国湖南教育総会職員

(1) 正副会長

分類	姓名	年齢	本籍	1910年 会員	1910年 幹事
D	符定一	36	衡山		
E	黎尚雯	45	瀏陽	●	●

(2) 評議員

分類	姓名	年齢	本籍	1910年 会員	1910年 幹事
A1	周啟洛	37	長沙	●	
	鄭寅亮	32	邵陽	●	●
	吳起凡	32	寧郷	●	
A2	鄧雲鵬	27	長沙		
	熊非龍	31	益陽	●	
	任傑	24	湘陰		
	張有晉	28	湘郷		
	張幹	28	新化	●	
B	周楷	27	長沙		
	羅正緯	28	湘潭		
	何榮榮	?	清泉		
C	鄭鴻鈞	?	宜章		
	吳静	?	宜章		
	郭向陽	?	桂東		
D	劉宗向	34	寧郷		
E	王錫藩	32	長沙	●	
	徐特立	40	善化	●	●
	王達	40	善化	●	●
	曾鑫	28	漢寿	●	
	劉明鏡	?	零陵		
F	徐翰祥	?	善化		
	貝允听	48	瀏陽	●	●
	謝菱	?	祁陽		
	姚建猷	?	沅陵		

(3) 幹事

分類	姓名	年齢	本籍	1910年 会員	1910年 幹事
A1	曹齡瑞	42	益陽	●	
A2	朱振黄	25	長沙		
	師吉	29	長沙		
	汪度	24	益陽		
	劉家瓚	28	湘陰	●	
	程士晉	24	寧郷		
B	陳裔虞	?	長沙		
	張本	30	長沙		
	許君颺	?	善化		
	黎錦熙	21	湘潭		
	劉自明	30	湘潭		
	王祐	27	湘郷		
	李樹人	26	湘郷		
	向焯	29	平江		
	楊岡	25	平江		
	孫子翹	31	寧郷		
	李澤棠	30	新寧		
C	唐和聲	?	衡山		
	劉向葵	?	(南路)		
D	王鳳昌	35	寧郷	●	
	雷豫	25	南洲		
E	任愷南	27	湘陰		
	胡兆麟	34	桂陽	●	
F	周大椿	34	湘潭	●	
	顏昌峽	44	湘郷	●	
	鳳高翥	?	桃源		
	黄右昌	?	安福		
G	胡豫章	40	湘陰	●	
	楊宗岱	?	寧遠		
	李在衡	?	(南路)		

(4) 分類別

経歴	正副会長	評議員	幹事	合計
A：中路師範学堂卒		8	6	14
B：優級師範学堂卒		3	11	14
C：南路師範学堂卒		3	2	5
D：京師大学堂卒	1	1	2	4
E：その他国内学堂卒 ・学務経験者	1	5	2	8
F：日本留学生		4	4	8
G：不明			3	3
合 計	2	24	30	56

(5) 路界別

路界	正副会長	評議員	幹事	合計
中路	1	16	22	39
西路		2	3	5
南路	1	6	5	12
合計	2	24	30	56

注1：(2)・(3) の分類欄のA1は速成科卒業、A2は優級選科卒業を示す。ともに(4)ではAに分類している。

注2：年齢欄は『中路師範学堂職員教員学生姓氏表』、『京師大学堂同学録』、『湖南優級師範学堂同学録』、『湖南教育総会会員一覧』より算出。

出典：上述の各史料および『湖南教育雑誌』1-2、記録、本省教育界状況、1912年7月1日発行、より作成。

表8は、1912年1月に当選した職員を経歴順に配列したものである。また、彼らのうち経歴が判明する者をまとめたものが表9である。改組後の湖南教育総会は、職員として会長・副会長のほか、「評議員」と「幹事」がおかれた。評議員と幹事の職務は「簡章」によると、評議員は各会員や湖南学務司および会長からの議案を評議する。そして幹事は編集・書記・会計などに分かれ、それぞれ日常業務を担当する。つまり、他省の例と同様、評議員は議決機関、幹事は執行機関としての役割を担い、評議員のほうが大きな権限を有していた⁽²⁹⁾。

表8にみえるとおりの、1912年職員は1910年職員に比べ、国内学堂卒業生の人数が大幅に増加し、留学生の割合が相対的に減少してしているが、従来の枠組からいえば、開明的紳士・留学生・国内学堂卒業生によって構成されていること自体に変わりはない。つまり、

表9 1912年職員 経歴判明者

分類	姓名	本籍	生没年	経歴	参照
A	張幹	新化	1884-1967	1909年中路師範学堂優級選科を卒業後、同学堂で教員。	民892
B	黎錦熙	湘潭	1890-1978	生員。1911年優級師範学堂を卒業後、『長沙日報』主筆、『湖南公報』総編輯。	下237-239
D	符定一	衡山	1877-1958	1908年京師大学堂師範科を卒業後、順天高等学堂・湘華学堂で英文教員。	下43-44
	劉宗向	寧郷	1879-1951	1908年京師大学堂師範科を卒業後、山西大学堂で史地教員。辛亥革命後湖南へ。	下53-55
E	任凱南	湘陰	1884-1949	拔貢。湖南高等学堂卒業。	下117-118
F	顔昌峽	湘郷	1868-1944	廩生。1902年日本へ官費留学。帰国後、湖南高等学堂・優級師範学堂など教員。	歴406

注1：分類欄のアルファベットは、表8に対応。

注2：参照欄の略号は次のとおり。数字は頁数。

下 = 『湖南省志 第三十卷 人物志』下冊。民 = 『民国人物大辞典』。

歴 = 同書編委会編『湖南歴代人名詞典』（湖南出版社、1993年）。

従来の枠組のみでは、このたびの職員構成の変容を十分にとらえることができない。そこで、本稿の枠組に基づけば、次のことに気づかされる。それは、1910年職員のうち、私立学堂グループからは徐特立しか再選されていない一方で、中路師範学堂グループからは黎尚雯・貝允昕・鄭寅亮が再選されていることである。また、1912年職員は、中路師範学堂卒業生が最多を占めていること、そして1910年幹事には存在しなかったものとして、南路師範学堂、優級師範学堂、そして京師大学堂の卒業生がいることに注意を要する。以下、各師範学堂について説明しよう⁽³⁰⁾。

南路師範学堂は先述の三路師範学堂のひとつで、中路師範学堂と同時期に衡山県に設立された。この学堂もまた優級選科を有し、表8の南路師範卒業生はいずれも優級選科の出身である。彼らは先述の中路師範卒業生と同様、1909年に卒業した。

優級師範学堂は、中等教育機関（中学堂・初級師範学堂）の教員を養成するため、1908年に開学した官立学堂である。開学時、修学期限を2年とする優級選科班が設けられ、学生360人が入学した。また、中路師範学堂の優級選科班のうち、1909年に卒業しなかった学生もここに編入された。彼ら優級師範学堂の学生は1910年から1911年にかけて卒業した。

京師大学堂は、1898年に北京に設立された全国最高学府で、師範科や予備科などが設けられていた。1912年の職員のなかで京師大学堂卒業生の人数は少ないが、注意を要する。というのも、先述のとおり、臨時正会長に選出された符定一もまた京師大学堂の卒業生だ

からである。また、表8の王鳳昌・劉宗向・雷豫の3人も、符定一と同時期に京師大学堂の師範科および予備科に在籍している⁽³¹⁾。彼らは1904年末に入学、1908年末から実施された卒業試験を受け、王鳳昌・劉宗向は師範科の最優等、符定一は師範科の優等、雷豫は予備科の中等という成績で卒業している⁽³²⁾。

彼ら京師大学堂および各師範学堂の優級選科卒業生は中等教育機関の教員資格を有し、地方教育界における地位は比較的高いといえる。それでは、京師大学堂の師範科・予備科卒業生と各師範学堂の優級選科卒業生とではいずれのほうが地位が高いかというと、清末の学堂奨励、すなわち卒業後の資格に関する規定からいえば、京師大学堂師範科・予備科のほうがやや高位の資格を有している⁽³³⁾。また、各師範学堂卒業生に比べると、符定一や劉宗向はいずれも高等教育機関の教員歴をも有している（表9参照）。ここから、各師範学堂の優級選科卒業生が湖南教育総会の職員を務めることや、京師大学堂卒業生が臨時正会長や評議員を務めることは、まったく問題がないように思える。しかし、前章で考察した清末湖南教育界の文脈に基づけば、彼らは私立学堂グループに比べ、教職員歴の面で実績が少ないこともまた確かである。

このように、1912年職員に私立学堂グループが極端に少ない一方、各師範学卒業生が多く当選しているのはなぜか。この疑問をとくためには、辛亥革命直後における改組の過程を考察する必要がある。

辛亥革命直後の改組の様子は、それからおよそ半年後にあたる1912年7月、臨時正会長符定一から湖南都督譚延闓へあてた呈文⁽³⁴⁾に、その一端をかいま見ることができる。呈文は、次のように言う。

本会は、昨年秋の湖南反正（引用者注：陰暦宣統3年8月19日の武昌起義に呼応した湖南独立）以後、軍務に忙しく、旧職員らも多く政務を担当することとなった。本会の同人らは、民国が建国されたばかりで教育研究は一刻も猶予してはならないと考え、ここに旧会員および新入会員を集め、議会在が推薦した各属の学務代表とともに改めて組織することにした。当時、旧幹事たちは代表の彭国鈞を派遣して会議に列席させ、宣言して公衆の面前で辞職した。彭国鈞が言うには、「旧幹事の任期満了者は、かつて『陰暦9月20日に教育大会を開き、さらに選挙を行う』と布告したが、起義（引用者注：上述の反正に同じ）によって未だ果たせていない。今、教育界の同人はすでに本会を組織し、旧幹事は極めて歓迎の意を表している」と。

こうして1912年1月に成立大会を開催し、投票によって符定一ほか各職員が選出され、

湖南都督府および中央政府教育部に対して湖南教育総会の登記を申請し、認可を受けたという。

この呈文は臨時正会長符定一、つまりは改組後の首脳部によるものであり、そのまま信用するわけにはいかない。ただ、すでに湖南都督府の認可を受けているということは、すなわち清末湖南教育総会の中心人物であった湖南都督の譚延闓が、符定一らの申請を認可したことを意味している。また、湖南教育総会の改組をめぐる混乱を伝える史料は今のところ見あたらない。これらの理由により、本稿ではひとまずこの呈文に依拠して、辛亥革命直後に改組を執行した理由、および改組を主導した勢力を解明することにした。

まず、辛亥革命直後に改組を執行した理由について呈文は、本来は陰暦の宣統3年9月20日、すなわち陽暦の1911年11月10日に行う予定であった職員選挙が、1911年10月10日以降の革命の勃発で宙に浮いたためという。つまり、清末の湖南教育総会が職員の任期を1年間で規定していたとすれば、前回の1910年に選出された幹事は、呈文のとおり辛亥革命前後で任期満了になっていたことになる。よって、辛亥革命直後に改組した理由は、それが本来湖南教育総会の職員改選の時期であったため、と考えることができる。

次に、果たしてどのような勢力が改組を主導したのであろうか。呈文は、旧職員の多くが政務を担当することになったため、湖南教育総会が顧みられなくなった、と述べる。たしかに、辛亥革命後における湖南教育総会の中心人物の動向に目を向けると、会長の黄忠浩は革命のさなかに殺害され、副会長の譚延闓は湖南都督に就任したほか、劉人熙・龍璋・陳潤霖・彭国鈞らはいずれも譚延闓政権の要職についていた⁽³⁵⁾。また、胡元倓は1910年に日本留学生監督に任じられて日本に渡っており、武昌起義勃発後に湖南に戻ったという⁽³⁶⁾。これらにより、呈文の内容は説得力を持つといえよう。とくに私立学堂グループの面々は譚延闓政権の政務、および自らの学校の運営に専心し、湖南教育総会の会務は優先されなかったとも考えることができる。では、私立学堂グループなど旧職員にかわって改組を主導した勢力はというと、呈文がいうところの新旧会員および議会が推薦する各属の学務代表であり、とくに各師範学堂卒業生たちであったといえる。私立学堂グループの多くは改組に参加しなかったか、参加しても主導的な立場にはなかったとみてよい。

では、当然の疑問として残るのが、なぜ私立学堂グループは改組を主導しなかったか、また、新会員は湖南教育総会に何を求めたか、であろう。呈文は改組の動機について、「民国が成立したばかりで教育研究は一刻を争うため」と述べた。教育界においてこの動機は極めて妥当なものであるが、果たしてその背後にはどのような理由があるのか、当時の状況から推測してみたい。

実のところ、私立学堂グループが湖南教育総会をあえては必要としなかった理由は、各

師範学堂卒業生が同会を必要とした理由と表裏一体だったと考えられる。清末においては、湖南の教育行政は清朝が派遣する提学使が握っており、湖南教育総会は湖南教育界人士が結集し、提学使に対して教育要求を表明するための機関であった。しかし、清朝の支配により脱した後、湖南の行政権は湖南人の手にわたり、省教育行政機関である湖南学務司の司長に就任したのは、私立学堂グループの陳潤霖であった⁽³⁷⁾。すなわち、私立学堂グループは湖南教育総会に依らずとも省教育行政に直接関与できたため、あとは自らの学校の運営に専念すればよかったと考えられるのである。

自らの活動基盤を有する私立学堂グループに対し、各師範学堂卒業生が置かれた状況はどのようなであったか。そもそも1908年に優級師範学堂が設立されたのは、それまで湖南省には中学堂が多く設立される傾向があり、今後の中学堂増加を見込んで中等教育機関の教員を補充するためであった⁽³⁸⁾。しかし、実際はどうであったか。こころみに1907年と1912年のそれぞれの中等教育機関数を比較する⁽³⁹⁾と、1907年の計76所（中学堂39・初級師範学堂19・師範伝習所等7・実業学堂11）に対して1912年は計67所（中学校29・師範学校31・実業学校7）と、全体では減少しているのである。これは不完全な統計であるため断定はできないが、少なくとも中等教育機関が大幅に増加しているとはいいがたい。

このような状況で三路・優級師範学堂は1909年から1911年にかけて卒業生を輩出した。1907年前後において、三路師範学堂の優級選科には合計290人が在籍し、そのうち6割弱にあたる165人が卒業していることが確認できる⁽⁴⁰⁾。また、『優師同学録』によると、1910年の優級師範学堂の在籍数は311人で、三路師範学堂と同様に6割弱とすると、およそ180人が卒業したことになる。ここから、およそ340人以上の優級選科卒業生が教育界に参入していったと考えられる。そこで、先述の中等教育機関の教員数を比較すると、1907年の計705人に対して、1912年は計1149人にまで増加しているのである。これは、1校あたりの教職員が充実したととらえることもできるが、師範学堂卒業生にとっては、中等教育機関が増加していないという状況は就職難に直結していたと考えられるのである。

1912年5月に湖南全省高級中学校（のちの湖南省立第一中学校）が設立されたことは、上述の文脈に基いて理解することができる。『教育雑誌』によると、同学校を設立する背景には、湖南の路界問題や中学校の学力問題があったというが、ここではどのような人々によって設立されたかに注目しよう。まず「優級師範学堂の諸君」が発起し、「政界・学界および特別議会」はみな極めて賛成した。そこで教育総会会場に集合して発起会を開き、「廖名縉ら20人あまり」が校董（現在の理事にあたる）となった。湖南都督および学務司も賛意を示して認可登録したので、教育総会会場で校董が投票し、「符定一」を校長に、「廖名縉・貝允听」を名誉校長に選挙した⁽⁴¹⁾という。すなわち、設立に関わったのは、その

多くが湖南教育総会の改組を主導した面々であることがわかる。さらに注目すべきは、廖名縉・貝允昕ら清末の湖南教育界の中心人物を後ろ盾にして、符定一が校長に就任していることである。つまり、同校の設立は地域社会や学生の需要に応えるとともに、各師範学堂卒業生のために必要だったのではないかと考えられるのである。

国内学堂（とくに師範学堂）卒業生は何を求めて教育界に参入したか。ある者は「教育救国」、すなわち教育で中国を救わんとするためであろうし、ある者は「昇官発財」、すなわち教育界からさらなる立身出世をはかるためであろう。もっと卑近に言えば、日々の生活のためであろう。ともかく、どのような動機であれ、教育界に参入した彼らがひとしく必要とするものこそ、自らの活動基盤としての学校である。さらに言えば、すでに彼らが入り込む余地の少ない私立学校ではなく、省教育經費によってこれから設立・運営されるべき省立学校であろう。彼ら国内学堂卒業生が教育総会に結集したのは、教育研究機関としての側面だけではなく、私立学堂グループに比べて自らの活動基盤が不安定であった彼らが、省教育行政機関に提言できる権限を持つ公的機関を欲してのことではなかろうか。

Ⅳ 1913年以後の湖南省教育会

1 湖南省教育会への改組と1913年の職員構成

「簡章」によると、1912年1月の改組はあくまで暫定的なものとされていた。同年9月、北京政府教育部より「教育会規程」が發布されると、これにしたがって同会は「湖南省教育会」に改組し、1913年3月に職員選挙を実施したのである。

1913年改組の際に制定された「湖南省教育会章程」は、会員資格をはじめ、基本的に「教育会規程」の語句をほぼそのまま踏襲した⁽⁴²⁾。それでは、「湖南省教育会章程」で注目すべき点は何かということ、職員に関する規定である。1912年には会長・副会長のほか、評議員・幹事がおかれたことは先に触れたが、これに対し、1913年の湖南省教育会は評議員を撤廃して、会長・副会長・幹事のみとし、幹事を80人に増員した。さらに、会長・副会長・幹事の選出は会員全員の投票によると規定した。

そもそも教育会における評議員制は、清末の江蘇教育総会が採用したシステムで、これによって同会は全省教育界の総意を代表するという体裁を整え、また地域間対立を融和しようとしたことが、高田幸男氏によって解明されている⁽⁴³⁾。これに対し、湖南省教育会も自らを湖南教育界の中心機関と位置づけており、また幹事80人という数は湖南省下の県数を意識したものともいわれる⁽⁴⁴⁾。ただ、清末の湖南教育総会から推測するに、会員の本籍が中路に集中しているとみられる状態で、会員全員の投票による職員選挙を実施す

ればどうなるであろうか。

1913年に当選した職員は表10を参照されたい。また、当選者のうち、経歴が判明する者をまとめたのが表11である。表10にみられるとおり、符定一が引き続き会長に当選したほか、中路・優級師範学堂の卒業生が幹事全体のおよそ4分の1ずつを占め、京師大学堂卒業生もまた一定数を保っている。そして、私立学堂グループは誰も職員に当選していないことが明らかである。また、1910年職員のうち1913年にも当選しているのは黎尚雯・貝允昕・王国鼎であるが、これは第2章で指摘した中路師範学堂グループのつながりによるものと考えられよう。つまり、今回の選挙では中路師範・優級師範・京師大学堂卒業生ら、1912年の改組を主導したグループが引き続き勢力を保っているとみてよい。また、地域の点では、不明者がやや多いものの、中路を本籍とする者が依然として多数を占めている。湖南省教育会は、実質的には省城を活動拠点とする教職員中心の組織になっていたとみられるのである⁽⁴⁵⁾。

最後に、1913年職員の任期について言及しておきたい。「湖南省教育会章程」では、職員の任期は3年とされた。これは省議会議員の任期と同様であり、地理的な問題を考慮した結果かもしれないが、江蘇省教育会などが任期を1年とするのに対して大幅に長い。1913年に選出された符定一ら職員の任期が1年ではなく3年（実際には1915年9月に職員改選が実施され、葉德輝が会長に当選）であることには十分注意しておきたい。なぜなら、1913年以後の政情不安定な湖南省において、1年ごとに職員改選を実施する必要がなかったことは、符定一ら職員が安定した地位を保つことができた一因となるからである。

表10 1913年湖南省教育会職員

(1) 正副会長

分類	姓名	本籍	1910年 会員	1910年 幹事	1912年 職員
D	符定一	衡山			●
E	黎尚雯	瀏陽	●	●	●
B	賀寅午	邵陽	●		

(2) 幹事

分類	姓名	本籍	1910年 会員	1910年 幹事	1912年 職員
A	朱振黄	長沙			●
	師吉	長沙			●
	周啟洛	長沙	●		●
	繆育南	長沙	●		
	童彪	長沙	●		
	黄英	長沙	●		
	饒裕	長沙			
	程士晉	寧郷			●
	吳起凡	寧郷	●		●
	許宗嶽	寧郷			
	汪度	益陽			●
	熊非龍	益陽	●		●
	申日午	邵陽	●		
	董璋	邵陽	●		
	張鴻翥	湘潭			
	王国鼎	湘郷	●	●	
	張幹	新化	●		●
	劉住桐	茶陵			
	方克剛	平江	●		
	黄人界	華容			
B	周楷	長沙			●
	梁季良	長沙			
	張本	長沙			●
	黄文耀	長沙			
	張其楷	長沙			
	王祐	湘郷			●
	李樹人	湘郷			●
	王邦模	湘郷			
	羅正緯	湘潭			●
	劉自明	湘潭			●
	譚雲龍	茶陵			
	周光漢	益陽			

分類	姓名	本籍	1910年 会員	1910年 幹事	1912年 職員
B	袁家元	寧郷			
	周漢藩	平江			
	彭運斌	攸県			
	林雯	醴陵			
	皮鑒	沅江			
	翦蓋南	桃源			
	周立	衡山			
C	吳靜	宜章			●
	郭向陽	酃県			
	楊砥才	(西路)			
	鐘才濂	(南路)			
D	易克臬	長沙			
	施文珪	長沙			●
	劉宗向	寧郷			●
	雷豫	南州			
F	貝允昕	瀏陽	●	●	●
	何炳麟	郴県	●		
G	柳天麟	長沙			
	李学趙	長沙	●		
	鐘啓賢	長沙			
	黄康年	長沙			
	廬鏡清	寧郷	●		
	覃澤賓	寧郷	●		
	戴榮階	寧郷			
	譚作民	湘郷			
	譚柄鑑	湘郷			
	彭熙治	湘陰			
	羅德源	益陽			
	楊宗岱	寧遠			●
	曹日曦	永興			
	陳建中	祁陽			
	張柄標	酃県			

分類	姓名	本籍	1910年 会員	1910年 幹事	1912年 職員
G	谷巨山	?			
	周維翰	?			
	李崇純	?			
	李炆	?			
	李占林	?			
	向振風	?			
	龔家凱	?			
	徐遂良	?			
	廖超羣	?			
	李勳崇	?			
	施仁溥	?			
	雷洪昀	?			
	李文垣	?			
	劉篤一	?			
	劉煥	?			
	?	?			

(3) 分類別

経歴	正副会長	幹事
A：中路師範学堂卒		20
B：優級師範学堂卒	1	19
C：南・西路師範学堂卒		4
D：京師大学堂卒	1	4
E：その他国内学堂卒・学 務経験者	1	
F：日本留学生		2
G：不明		31
合計	3	80

(4) 路界

路界	正副会長	幹事
中路	2	51
西路		8
南路	1	3
不明		18
合計	3	80

出典：「湘教育会改組情形」『湖南教育雑誌』2-6、
 記録、1913年4月15日発行、および表8
 前掲の各史料より作成。

表 11 1913年職員 経歴判明者

分類	姓名	本籍	生没年	経歴	参照
A	方克剛	平江	1884-1946	1909年中路師範学堂優級選科を卒業後、中路公学の設立に 参与。	下 110-111
B	彭運斌	攸県	1886-1970	1910年優級師範学堂卒業。辛亥革命後、湖南省立第一師範 学校などで教員。	歴 579
D	易克臬	長沙	1883-?	1910年京師大学堂訳学館卒業（『学部官報』145期）。	最 259
E	何炳麟	酃県	1877-1966	1903年日本へ留学、東京工業学校電気科に入学。1908年帰 国後、湖南高等実業学堂などで教員。	下 33-35

注1：分類欄のアルファベットは、表10に対応。

注2：参照欄の略号は次の通り。数字は頁数。

下 = 『湖南省志 第三十巻 人物志』下冊。歴 = 『湖南歴代人名詞典』。最 = 『最新支那官紳録』。

2 湖南省教育会と地方政権との関係

民国初期の湖南省は、複雑な政情を抱えていた。すなわち、辛亥革命後に譚延闓政権が樹立したのち、第二革命によって譚延闓が失脚し、1913年10月より湖北省出身の軍人である湯薌銘が湖南都督兼民政長に就任した。一般に、1913年10月から1916年にかけての湯薌銘政権期は、湖南人が弾圧に遭い教育界も大きな被害を受けた時期とされる⁽⁴⁶⁾。このような状況下において、湖南省教育会が活動を継続させ、符定一が会長に留まり続けることができたのはいかなる要因によるものか。以下、民国初期における湖南省教育会職員と譚延闓・湯薌銘政権との関係を考察する。

まず、清末の湖南教育総会は私立学堂グループや立憲派を中心としており、譚延闓の支持基盤となっていたことは先述のとおりである。一方、辛亥革命後の湖南教育総会と譚延闓政権との関係を推測するための手がかりとして、改組を主導した勢力に再び注目したい。それは、先の呈文で触れたとおり、新旧会員および議会が選出した学務代表であるというが、この議会とは、1911年末に開設し翌年4月に解散した「特別議会」を指す。曾田三郎氏の分析によると、特別議会の構成員は譚延闓政権に直接参加しようとしなかった各地の有力者が多かったようで、譚延闓政権とは必ずしも良好な関係にはなかったという⁽⁴⁷⁾。つまり、特別議会が推薦したという学務代表も、必ずしも親譚延闓派とは限らなかったとみられるのである。

次に、湖南省教育会と国民党との関係を検討する。1912年8月に北京で国民党が結成されると、9月末には湖南に国民党湖南支部が成立、譚延闓を支部長とし、譚延闓政権の構成員の多くが党員となった。そして、国民党湖南支部設立の中心人物であった仇鰲が1912年9月に湖南民政司長に就任、衆議院議員選挙における国民党勝利のために、国民党員を選挙区監督および各県知事に任命し、あわせて各県に党組織を成立させた。ここに、湖南省は国民党の勢力が極めて強い地域となったのである⁽⁴⁸⁾。しかし、国民党湖南支部の主要人員を見ると、湖南省教育会の職員はわずかに符定一のみである⁽⁴⁹⁾。この湖南支部は「官僚や投機分子が混じっている」と評されるとおり、符定一も国民党に深く関わっていたかどうかは極めて疑わしいと言わざるを得ない。以上から、湖南省教育会の職員は譚延闓政権とは一定の距離をおいていたと考えるのが適切であろう⁽⁵⁰⁾。これが、湯薌銘政権下において湖南省教育会が存続することができた理由のひとつと考えられるのである。

また、湯薌銘政権初期における湯薌銘の事情、すなわち1914年初頭の時点ではいまだ湖南省に確固たる勢力を築いていなかったことが指摘できる。具体例のひとつは省財政における「熊希齡派」の存在である。国税庁長劉棣芬・権運局長王銘忠・審計部長謝国藻ら

は国務総理熊希齡の任命で湖南省に派遣されており、湯薌銘の自由にはならなかった⁽⁵¹⁾。そして、もうひとつは、清末以来、湖南に隠然たる勢力を誇っていた葉徳輝ら、いわゆる保守派郷紳の「囲い込み」に失敗していたことである。湯薌銘は赴任直後、王闓運・王先謙・葉徳輝ら10人あまりを高等顧問官なる名誉職に招聘しようとしたが、だれも応じる者がなかった。また、官書報局を開設して彼らを再び招聘しようとしたが、その予算は年20万元以上という莫大な額がかかる計算であったため、先述の審計部長が予算計上を承認しなかったうえ、招聘された者は誰一人としてこれに応じず、逆に葉徳輝の侮蔑を招いたというのである⁽⁵²⁾。ここに、湯薌銘は湖南省における勢力基盤確立のため、懐柔できそうな勢力をほかに探す必要があった。それが、譚延闓政権とは一定の距離をおいていた湖南省教育会であったのではないかと考えられるのである。

湯薌銘の湖南都督就任後、1913年幹事の易克臬が教育司長に、会長の符定一が湖南の最高学府である高等師範学校校長に任命されるなど⁽⁵³⁾、湖南省教育会は湯薌銘政権と密接な関係をもったとみてよい。1912年から1916年まで『湖南教育雑誌』が継続刊行されたという事実も、湯薌銘政権下における湖南省教育会の運営が安定していたことのあらわれとみることができよう。

お わ り に

本稿は近代における教育会の実態を明らかにするための基礎的な作業として、清末民初における湖南省教育会の会員および職員構成とその変容を考察した。これによって明らかとなったのは、辛亥革命を画期とする職員構成の大幅な変化である。すなわち、光緒新政当初より教育改革に参加して教育界に確固たる地位を築き、1910年には幹事にも当選していた胡元倓ら私立学堂グループは、辛亥革命後には湖南省教育会の中核から姿を消す。彼らにかわって湖南省教育会の改組を主導し、職員選挙に当選したのは、中路師範学堂グループや、符定一ら京師大学堂および優級師範学堂などの卒業生であった。

マクドナルド氏は民国初期の湖南教育界における派閥について、「私立学校と省立学校の対立」と表現したが、本稿の考察に基づいてより正確に表現するならば、それは日本留学生など光緒新政期からの学務参与者と、清末の国内学堂（とくに師範学堂）卒業生との関係を基調としている。前者が拠点にしたのが私立学堂（私立学校）であり、後者が拠点にしたのが湖南省教育会であったといえよう。国内学堂卒業生が結集した湖南省教育会は、必ずしも譚延闓政権と良好な関係にあったわけではなく、むしろ第二革命後、湯薌銘政権と密接な関係を持った。そして、符定一らは省立学校校長に任命されることで、省立学校

をその拠点のひとつとしていくのである。

辛亥革命を境とする省レベルの教育会の改組をめぐる混乱については、たとえば湖北省の事例を『教育雑誌』の記事から断片的にうかがうことができる。それによると、辛亥革命後の湖北省教育会の改組にあたっては選挙の方法などで議論が紛糾し、また「新旧学派」の意見が一致しないため、会長選挙も難航したという⁽⁵⁴⁾。湖北における「新旧学派」が何を指すのかは今後の検討が必要であるが、湖南省の場合と同様、省レベルの教育会といういわば権威化した組織をめぐる教育界人士、とくに師範学堂卒業生ら自らの活動基盤を持たない者の思惑があったとみてよからう。

湖南省教育会に関する研究はいまだ緒についたばかりである。民国初期の符定一会長期における湖南省教育会の実態、すなわち実際にどのような活動を行ったか、地域社会にとって湖南省教育会はどのような存在であったか、などを明らかにすることは今後の課題としたい。

註

- (1) 横山英「二〇世紀初期の地方政治近代化についての覚書」(同編『中国の近代化と地方政治』勁草書房、1985年、所収)。
- (2) 本論に関連するものとして、高田幸男「江蘇教育総会の誕生—教育界に見る清末中国の地方政治と地域エリート」『駿台史学』第103号、1998年、を挙げる。また、氏の一連の研究は、同「江蘇教育会と清末民初の政治構造」『明大アジア史論集』第10号、2005年、に整理されているので、ぜひ参照されたい。
- (3) 近代中国の教育会および教育団体については、張偉平『教育会社与中国教育近代化』(浙江大学出版社、2002年)。また、浙江省教育会を扱ったものとして、白錦表・陳春萍「浙江教育会考略」『浙江万里学院学报』14-3、2001年、など。
- (4) 拙稿「清末湖南省長沙における民立学堂設立と新教育界の形成について—胡元倓と明德学堂を中心に—」、『東洋史研究』62-2、2003年、および同「清末湖南省長沙における地方教育行政の実態について—提学使呉慶坻と教育界人士との対抗関係を中心に—」『史林』91-4、2008年。
- (5) 『湖南教育雑誌』は湖南省教育会主弁、1912年6月創刊。初期は半月刊、1914年8月発行の第2年第14期(以下、巻号は2-14の形で表記)以降月刊。1916年6月発行の5-6で停刊する。上海図書館編『中国近代期刊篇目彙録』第3巻上(上海人民出版社、1983年)、90～123頁に各号目録が収録されている。
- (6) 湖南教育史編委会編『湖南教育史』第2巻(岳麓書社、2002年)、396～400頁。
- (7) このような観点からきわめて注目すべきは、高田幸男氏による無錫教育会の役員構成分析である。高田幸男「近代中国地域社会と教育会—無錫教育会の役員構成分析を中心に—」『駿台史学』第91号、1994年。氏は清末から1930年代にかけての同会の役員構成を詳細に分析し、時期ごとの特徴を明らかにした。本稿もこれを大いに参考とした。

- (8) Angus W. McDonald, Jr., *The Urban Origin of Rural Revolution: Elites and the Masses in Hunan Province, China, 1911-1927*, University of California Press, 1978, pp. 84-90.
- (9) 桑兵『清末新知識界の社團と活動』（生活・読書・新知三聯書店、1995年）。
- (10) 以上、湖南教育総会の成立については前掲拙稿2008年。
- (11) 清水稔「湖南立憲派の形成過程について」『名古屋大学東洋史研究報告』第6号、1980年、および曾田三郎「辛亥革命前の諸改革と湖南」（横山英編『中国の近代化と地方政治』、勁草書房、1985年、所収）など。
- (12) 賈維『譚嗣同与晚清士人交往研究』（湖南大学出版社、2004年）。
- (13) 「湘省建築教育総会」『教育雑誌』1-12、記事、1910年1月10日発行。
- (14) 「湖南教育総会建築告成」『教育雑誌』2-6、記事、1910年7月16日発行。なお、会期については、記事は「本月11日から15日」という。本史料の発行年月日が宣統2年6月25日であることから、本稿では会期を宣統2年6月と判断したが、これ以前に開催された可能性もあることを付記しておく。
- (15) 張偉平前掲書、56頁。
- (16) その一方で、会員を輩出していない州県も少なからずあることに留意しておきたい。以下にそれらの州県を列挙する。宝慶府下の新寧県、永順府下の龍山県・桑植県、靖州下の綏寧県・通道県、永綏府下の衡州府下の安仁県・耒陽県、永州府下の永明県、郴州下の永興県・宜章県、桂陽州下の嘉禾県。
- (17) 湖南第一師範校史編写組編『湖南第一師範校史』（上海教育出版社、1983年）、5～6頁。
- (18) 諮議局議員について補足すると、湖南省志編纂委員会編『湖南近百年大事紀述』（第二次修訂本、湖南人民出版社、1980年）、271～274頁に列挙されている諮議局議員82人のうち27人が『会員一覧』に名を連ねている。
- (19) 「奏定各省教育会章程摺」（多賀秋五郎『近代中国教育史資料』清末編、日本学術振興会、1972年、430～433頁）。試みに後述する『高等同学録』の在學生157人および『優師同学録』の在學生311人の名が『会員一覧』にあるかどうか確認すると、『優師同学録』の1人を除きいずれも『会員一覧』にはその名がない。その1人とは賀寅午という。『会員一覧』によると邵陽県の人で、字稲森、32歳、住所は邵陽中学堂、とある。賀寅午は後述するとおり1913年に副会長に当選する人物である。『優師同学録』の在學生のなかで、なぜ彼のみが会員であるかについては、現時点では留保せざるを得ない。
- (20) 『宣統庚戌年湖南高等学堂同学録不分卷』、清闕名輯、排印本。『湖南優級師範学堂同学録一卷』、清闕名輯、排印本、宣統2年刊。いずれも東洋文庫所蔵で、以上の書誌情報も東洋文庫による。
- (21) 『乙巳』『丁未』はいずれも湖南省図書館所蔵。以下の書誌情報は同図書館による。『乙巳』、光緒32年、湖南機器印刷局鉛印本。『丁未』、光緒33年、湖南機器印刷局鉛印本。いずれも、高等・中等・初等の順を基本に、官公私の各学堂別に教職員の役職・姓名・字・年齢・本籍・連絡先が列挙されている。
- (22) 前掲拙稿2003年、および石山「省憲下之湖南」（竹内実監修『毛沢東集補卷』第2巻、蒼蒼社、1984年、所収）。なお、石山は毛沢東のペンネームの一つとされる。
- (23) 湖南省図書館所蔵。中路師範学堂編、光緒33年該校活字本。以上の書誌情報は湖南省図書館による。
- (24) 「学部奏湖南三路師範学堂優級選科畢業請獎摺」『政治官報』第1247号、摺奏類一。

- (25) 前掲拙稿2008年。
- (26) 『民国人物大辞典』830頁、および『湖南省志 第三十卷 人物志』下冊、43～44頁。このほか、彼の伝記として、唐世凡「文字学家符定一伝略」(『湖南文史資料』第28輯、1987年80～83頁)があるが、概して符定一に関する史料は少ない。このような史料状況において、著名な教育学者である舒新城の回想録には、舒が湖南高等師範学校在学中の校長であった符定一について触れられており、貴重である(舒新城『我和教育』上、張玉法・張瑞徳主編、中国現代自伝叢書 第2輯4、龍門出版社、1990年、第1篇第6章4)。これについては稿を改めて論じたい。
- (27) 多賀秋五郎『近代中国教育史資料』民国編上(日本学術振興会、1973年)、解説030、59～60頁。
- (28) 「中華民國湖南教育総会簡章」『湖南教育雑誌』1-1、法令文牘、1912年6月発行。
- (29) 張偉平前掲書、47～56頁。
- (30) 以下、南路師範学堂については、『湖南教育史』第2巻、209～212頁。優級師範学堂については、『湖南第一師範校史』、2～6頁、『湖南教育史』第2巻、205～206頁および213～216頁。
- (31) 『京師大学堂同学録(1906)』(房光楹輯『清末民初洋学学生題名録初輯』中央研究院近代史研究所、1962年、所収)
- (32) 「奏京師大学堂予備師範兩科学生畢業照章請獎摺(併單)」『学部官報』第96期。
- (33) 学堂奨励については、早川敦「清末の学堂奨励について—近代学制導入期における科挙と学堂のあいだ—」『東洋史研究』62-3、2003年、を参照。
- (34) 「第一次向都督請改組文」『湖南省教育会第一次報告書』、文牘。『湖南省教育会第一次報告書』(湖南省図書館所蔵)は、1913年に改組された湖南省教育会(後述)によって編纂され、各界に配布された報告書である。この呈文には日付が記されていないが、その内容は、辛亥革命直後の改組の様子を述べたうえで、北京政府はこのとき教育会に関する規程を起草中で未だ公布していないが、予定どおり1912年7月に職員改選を行う旨を都督譚延闓に申請したものである。
- (35) 子虚子「湘事記」内政編(中国史学会編『辛亥革命』、上海人民出版社、1957年、第6巻、所収)。
- (36) 「明德校史」(錢无咎編『明德校史』、湖南明德中学校、1948年)、宣統2年および宣統3年の条。
- (37) 「湘事記」内政編(前掲)参照。ただし陳潤霖は1912年初頭に辞職する。
- (38) 優級師範設立の経緯については、前掲拙稿2008年を参照。
- (39) 1907年は『第一次教育統計図表』、1912年は『中華民國第四次教育統計図表』(東洋文庫蔵)より。
- (40) 三路師範学堂の在籍者数は、中路98人、西路120人、南路92人である。『中師同学録』のほか、劉定儀「湖南西路師範学堂実録」、および何備・李大樑「湖南南路優級師範学堂建設歷程及其演变」、ともに『湖南文史資料選輯』第20輯、1986年、78～86頁、87～92頁。また、卒業生については、中路66人、西路42人、南路57人が学堂奨励を受けている。「学部奏湖南三路師範学堂優級選科畢業請獎摺」(前掲)。
- (41) 「湖北創設全省中学校」『教育雑誌』4-1、記事、1912年4月10日発行。記事名には湖北とあるが、その内容から湖南の記事であることは明らかである。

- (42) 「湖南省教育会章程」『湖南省教育会第一次報告書』所収。
- (43) 高田幸男前掲論文1998年。
- (44) 「省教育会選挙之波折」『大公報』（長沙）1916年10月2日、湖北省図書館所蔵。なお、1915年から1916年にかけての職員選挙については、稿を改めて論じたい。
- (45) このときの会員数は明確ではないが、投票結果によると会長の符定一が1089票を得ている（「湘教育会改組情形」『湖南教育雑誌』2-6、記録、1913年4月15日発行）ことから、少なくとも1000人以上の投票者すなわち会員がいたことが推測できる。
- (46) 劉決決主編『湖南通史 近代卷』（湖南出版社、1994年）、737～745頁、など。
- (47) 曾田三郎「辛亥革命における湖南独立」『史学研究』第133号、1976年。
- (48) 曾田三郎前掲論文1976年、および楊鵬程「試析辛亥革命時期的譚延闓政權」『近代史研究』総第26期、1985年。
- (49) 『湖南近百年大事記述』、326～328頁。
- (50) 1913年の職員に注目すると、副会長の黎尚雯は第二革命ののち国会議員資格を剥奪され武漢に逃れ、賀寅午は第二革命の際に武器を私蔵して「叛徒」を助けたことで罪に問われ、逃亡した。『政府公報』第569号、命令、大總統令。
- (51) 「湖南政局之変遷」『時報』1914年2月15日。
- (52) 「湘江近事記」『時報』1914年1月11日、および「湖南政局之変遷」（前掲）。
- (53) 湖南省地方志編纂委員会編『湖南省志 教育志』下冊（湖南教育出版社、1995年）、1288頁、および「湖南高等師範学校校長符定一到校演説詞」『湖南教育雑誌』2-18、雜纂、1913年12月31日発行。
- (54) 「教育会類誌（五）湖北」『教育雑誌』3-12、記事、1912年3月10日発行、および「教育会類誌（四）湖北」『教育雑誌』4-1、記事、1912年4月10日発行。